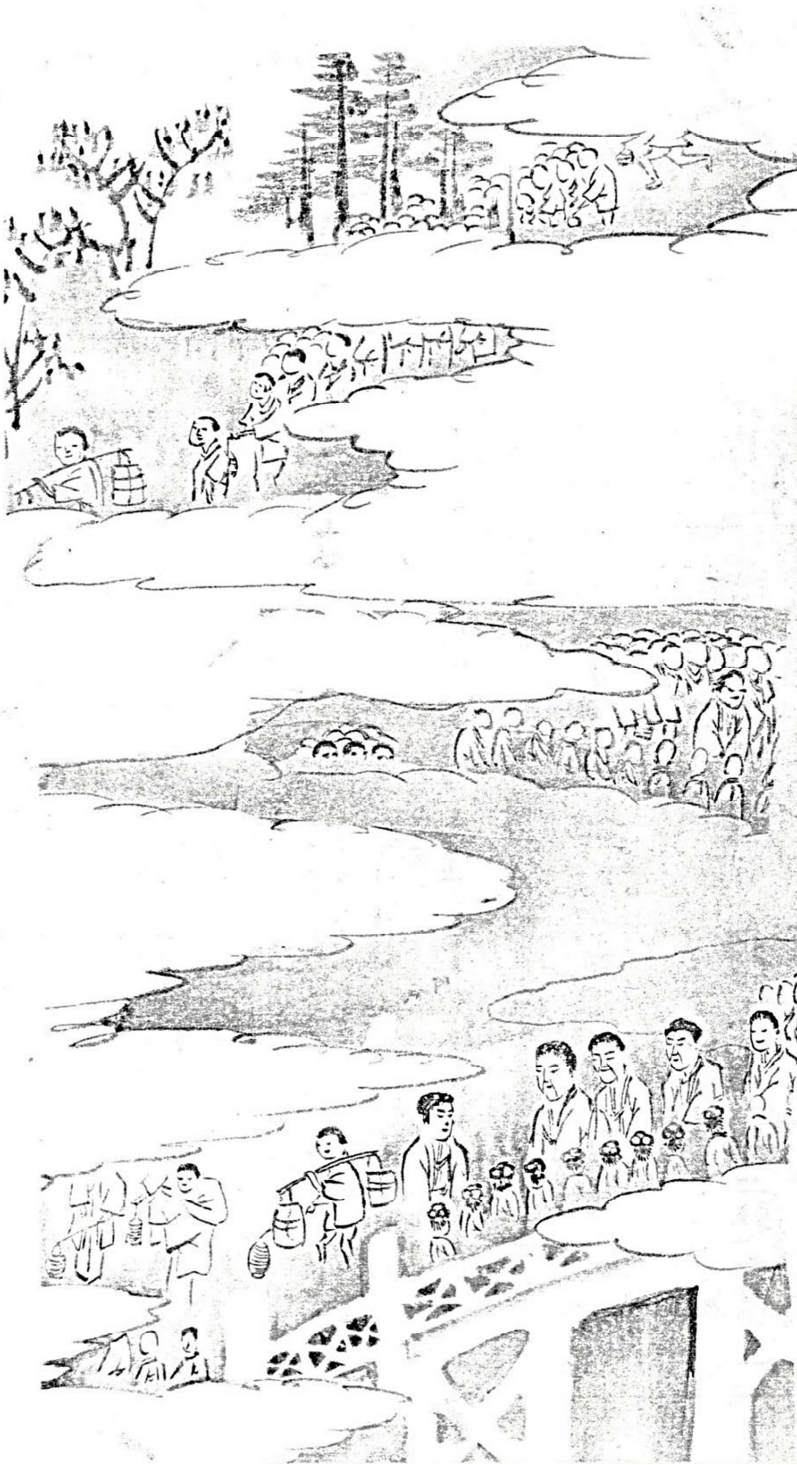


きりしま山

石川理紀之助著

きりしま山解説

本書は、明治三十五年に石川理紀之助等が行った九州宮崎谷頭指導のあらましについて記した小著である。夜学会の様子や送別のありさま等が詳細に書かれている。



きりしま山

秋田 石川理紀之助著

国々に農家経済法実施せんとて適産調員八名、三月末秋田をいで立ぬ。

同二十日九州霧島山の麓北諸県郡庄内村の在に前田正名君が国家の為に企て玉いし疏水工事の開墾地あり。此美挙に加勢し奉らんとて、先山田村中霧島谷頭という処に本部を置き、おのれと伊藤与助、伊藤永助、佐藤市太郎の四人居り、志和池村野々美谷十万寺には森川源三郎、伊藤甚一の二人、庄内村干草場には佐藤政治、田中源治の二人居り。

各々事務所を設けて出張せり。各部落の人氣をはかり、先貯金取扱をはじめ児童の夜学、男子・婦人の経済の講話等を実行し日夜奨励せしが、始の程は言葉も解せずいと疎かりしも、日を逐い月を重ねて互に其親しみ厚く、いかなる村童も礼をなさぬものなく、又夜学生の勉強なることたぐいなく進みて僅か三四ヶ月の間に日常の文通する程に至れるものもおおく、又予講話する席には傍らに速記するものさへ出来にけり。これ皆一行の人々の熱心に教育せし

力によりてなれる也。

今其あらましを言わんに、夜学の時間午后七時より九時まで二時間と定めけるに、日々学校に出る十一二才までのものは、学校よりかえれば直に事務所の傍に握飯を食して、掛板の音を遅しと入り来るのと遠近の部落共に残る者なし。殊に干草場などは児童の幼きが多ければ、昼学校に出るは仮の如く、夜学舎は我家にありて母の傍に居る心地して、身にその物さえ二人の人々に預け置いて直に事務所に帰るなど、まことの母に物いうが如し。

又、十五六才以上にして旧麓などの如き遠き方より谷頭に来るは、昼労働するものなれば、此地方の夕あがりには七時に至らざれば田畑よりかえらず。まことに月を踏みてかえるに違わず。故に夫より事務所に至ればはや八時に近し。残る僅の時間に学びて九時に至れば夜締法を行いて寐につく。

いつも事務所に止宿するものいずれにも二三十人にくだらず。さるを夏の蚊の多き時にも蚊屋は一つ宛ならでなければ、皆々頭を蚊屋の中に入れさせて裾を毛布もておおい、又寒くなりては我等が一行は纏り寐て、二三枚の布団を余してそれを中に置いて、皆々の足を延させ頭を出さしめて伏さするに、幼き

子の眠る時は抱かれても知らぬという諺の如く、夜中に至れば蚊屋より出て、又は布団より放れ、或は人の腹を枕にし、人の首に足をかけ、転げて土庭にさえ落ても猶眠れるものあり。幾度心を用いても忽に転げて居処も定まらず。其おさなきありさま見るもかなしかりき。

児童皆々寐に就しめて、九時頃より一行は手分をなして各部落貯金の取立に出て行。遠きに行ものは翌午前一二時に帰ること常也。暁二時に起て、三時に至れば掛板を打て村人に暁起を促がせり。一行回り番にて炊事をいとなみ暁学を励む。此時児童共に起て勉強するに怠るものなし。又一行は村人暁起の巡視に出つあり。未明に遠き部落の児童は未明に前夜持来りし草切簞をにないて直に野に出て草を切て、朝飯の時に宅に帰るが常なりき。

かくの如く勉強すること怠らず、習字・読書・算術・藁細工・作文・文字尋・字会いずれも日用の学問を教え、行状正しく、書を読むにも声を立ず、寐ては物言わず、立居起臥に至るまで心を注がせたり。実に夜学のけしきを外より望むに、数多のランプをともして講義・読書の声賑やかなるを以て、道行人も足をとどめぬはなし。

又婦人会を設けて、親に事え、夫に随い、子を養い、衆に親しみ、家を治るの道を教えしより、一入学生も母子共に心を合せて教に随うこと厚く、ながら親の如く子の如し。さるを歲月人をまたずとはや故郷に帰るべき日の近づきぬれば、教子の別れを惜むこと日一日と深く、足らずなり行く日数と共に、学ぶ心のいそしみて昼夜傍らをはなれず。いよ／＼十月一日には出立の事とはなりぬ。学生一同と谷頭島移りの碑のもとに写真をとりて永きかたみとはなしぬ。

三十日午前三時より学生の送別会を設く。こは出校の児童多ければ勸学時間にさわらぬ様にと其時刻をさだめしに、午前一時頃より駆集ること谷頭・干草場共百八名の学生、僅に病者二名の外悉く打集りぬ。かくて将来勉学・修身のことをさとして、学生の別の文を読上るや座中声をあげてなかぬものなし。其さま筆にも言葉にもつくすべくもあらず。かくて七時に近ければ学生に出校をすゝむれども座を去るものなし。漸くにさとし／＼て門を出立すれば女学生・男子とも爰かしこの垣根につどいて泣かなしむ。見るものあやしみ其よしを尋ねて共に泣かぬはなかりけり。あわれといわんも又言葉なし。

同じく午后三時には村人つどいて別を告ぐ。各部
落あまたの人々なれば、鼓打、舞をまい、唄をうた
う。其うたげ只ならず。されど学生のかなしみて泣
一声にも若かざりき。

午後五時頃に至りて別宴の人々かえりしを待て
学生の祖父母・父母ともかわり／＼おのれは某の祖
父、某の母と名のりてすゝみいで、親子にも増る情
のほどいかなればかくといひし後は、皆声くもりて
ことばなく互になきむせびぬ。逢うも別るゝも今は
じめの人に迄かゝる別のかなしかる、いかなる前世
の縁あるにや。人々かえりてしばし絶まとおぼしき
頃、かの病者の二人の学生病の床をおかして遠き病
院より帰り来て別をおしむ更に泪の種とはなりぬ。

又夕ぐれに、伊藤永助が担当せし前の試験田を人
なき事務所に打捨ていで立んもおしゝとて泣つゝ
せめては鳥犬の害を防がんとて枯竹を立て別れを
悲しむ。心なき草木も、今日おく露やみな泪ならん
かし。

いよ／＼明日の暁三時に出立たとせしに、三十
日のまだ暮れぬより、草鞋をこしにつけて事務所に
集る学生三四十名あり。猶夜たゞ人の入来る足音例
のホラ土にひゞきて眠もやられず。はや一時の針の

音きこゆ。起いでゝみれば台処まで知る知らぬ人あ
また丸寐せり。程なく三時になれば暁くらき空にと
もし火あまたかゝげて門出しぬ。

此頃建し島移りの碑を拝して出立ぬ。見送る人々
には皆鶺鴒島までを限りとして、橋の袂に至り部落分
けをして学生をならべて銘々の名を呼ばしめ、向後
元氣にしてよく勉強せよ、よき人になれかしとさと
していとま乞をなし／＼橋の上に至れば、干草場の
学生あまた居たり。これも同じくならべて暇乞をな
したるに、端の方に女学生あまたあり暇乞の半ばに
して声たてゝ泣出せば、おのれをはじめいずれも声
たてゝなく。

かくて残すことばも言つくさず、かぞうれば此暁
をいつのまにか集りけん、百八名の学生一人の残る
なく見送らる。程なく乙房に至れば、庄内の村長・
校長・教員のかた／＼あまたの学生を連れて暇乞に
いで来ぬ。岡田事務長、学校教員の諸氏、今屋・干
草場・宮島・両谷頭・竹脇其他の部落の人々あまた
こゝに別れたり。

乙房を過てしばし過行あとをみかえれば、猶暁の
霧のまぎれに男女の学生みな／＼したい来たり。か
えれといいても返りこともなし。行ば行、とまれば

とまりて退かず。かぎりもあらねば、ねもごろにさとして帰しやるも皆泪なりき。

猶十余名夜学の紙油を買うとて都の城に行かん
ということかこついたらんとは思いつゝ、志の厚き
わかれがたくて都の城に至り、夜明て南崎常右エ門
庄内郵便局長、山下校長と共に別かれぬ。

八時、夜学生竹森重二・村岡新之助・桜原金之助
三人と共に、深江芳太郎氏の案内にて小根占をさし
て馬車をはしらす。ひとり池田募氏五十市の学校の
前まで送り来て別れぬ。わかれにのぞみて人々のよ
めるうた

森川源三郎
ともし火に暁やみも知らぬまで見送る人の多くも
ある哉

佐藤政治
うみの子を千里の果に捨て行くとおもう思いの今
日にも有哉

伊藤甚一
たちねの親子そろいて我友の別をしたう心かな
しも

伊藤与助
したしみてむつびなれたる嬉しさは泪の種となり

にける哉

伊藤永助
友は皆朝とく立と聞しより夜ただといくることぞ
悲しき

田中源治
故郷に帰る心のうれしさも忘るゝまでに悲しかり
けり

佐藤市太郎
おしえ子がわかれおしみて傍をはなれぬみれば悲
しかりけり

石川理紀之助
あいがたきことをかたれるつらさには死に別れよ
り悲しかりけり

○

かくて二日夜、小根占には着ぬ。これも前田君の
開墾地なり。此処には僅に十日斗の日数なれば何事
をなさんも心に叶わず。さるを今年三月ばかり遠き
近きより引移りたる松ノ迫という新開にて、夏の頃
は食物さえ乏しく百合の根などをくわえて生なが
らえしなど、住処装みるもあわれなる一村あり。此
地に農家経済を実施せんと、午前三時より松明をふ
りともして山道七八合の遠きをたどり毎暁にかよ

いて一村の男女打集め農家につとむべき道をおしえしに、これも又親の如くしたいて忽ちに勤儉・貯蓄のしるしまで見えぬ。これより村を治むべき掟などを定めしに、其近村の人々も一日二日のほどにこれがひゞきに応ずるものあまた出たれど、はや出立の日とはなりぬ。

十三日の暁に小根占を出立んとて支度などしたれば、松の迫の人々残らずつどいて別れを惜む。老人あるは女などは坂の上という処の芝の上にて茶をのみてわかれたり。男は残らず遠き小根占までしたい来て、別るゝも又なみだの外はなかりけり。

それより鹿屋に講話して、十四日鹿児島市にわたり、こゝにて学生三人にわかれぬ。農会・報徳会・歌会等に招かれて、十九日に東襲山にうつり、国分にて深江氏にわかれ、二十日肥後の国には入りぬ。

明治三十五年十月廿日